



武田塾

武田塾の卒業生を追って 最終回  
社会福祉法人はらから福祉会  
はたまき・手づくりの里

編集部=文  
text by Kotonone  
岸本 剛=写真  
photograph by Tsuyoshi Kishimoto



# 商売のことを知らなかった 商売のことを知りたかった

「行きたくない」と決る太田幸二さんを、武田理事長は半ば無理やり、施設の副施設長に据えた。  
出向いた先は「はたまき・手づくりの里」。  
多くの課題を抱える施設。  
解決のために必要だったのは、  
自らが「商売」の感覚を身につけることだった。

ほんとうは、  
行きたくなかった

太田幸二さんが、はたまき・手づくりの里への異動を打診されたのは、二〇一〇年のこと。「ほんとうは、行きたくなかった」と打ち明ける。太田さんはそれまで、びいんず夢楽多(むらた)で製造管理や品質管理を担当していた。「びいんず夢楽多では、製造一本、現場一筋でやってきた。それなりに自信もついていた。ところが、はたまきでは副施設長として、製造だけでなく、施設の経営や運営も見なさい、という」(太田さん)。

現場で障害者といっしょにものづくりに携わり、苦労も喜びも、ともにすることになりがいを見出していた太田さんにとっては、すぐには受け入れることのできない辞令だった。「利用者といっしょに働きたい、たくさん製造したい、という気持ちが強かった。管理の方にまわってしまうと、利用者に接する機会が少なくなってしまうことが不安でした」。びいんず夢楽多に残った方が自分の力を発揮できる、と訴えたが、はらから福祉会の理事長であり、武田塾の塾長でもあ



る武田元さんは受け入れなかった。

「適任かどうか、ではなく、太田さんを試す意味で、はたまきに行ってもらった」。取材に同席してくれた武田さんは、いま、辞令の意図を明かす。「将来のはらから福祉会を背負って立つ人間は誰なのか。われわれが第一世代だとすると、太田さんは第三世代。第二世代のめどは、もう大体ついている。じゃあ、その次をどうするか。それを知るためには、試さなければわからない」。

太田さんに、仕事に向き合う意欲や、現場をうまく回していく力量があることは、びいんず夢楽多での働きぶりからわかっていった。では、現場の運営だけでなく、営業面や売上面も含め施設の全体を見ていく視野の広さや、施設、法人全体の将来を考える経営者の視点には、伸びしろがあるのか。「はたまきは、はらからの中で一番状況が悪い。だからこそやってもらいたかった」。

はたまきは、はらから福祉会の歴史にとって重要な施設でもある。宮城県柴田町からスタートしたはらから福祉会が、複数施設を展開し、いまのような、東北、いや全国でも有数の規模を



武田塾の卒業生を追って 最終回